

書 評

重度四肢外傷の標準的治療

— Japan Strategy —

土田芳彦 編著

重度四肢外傷の治療は整形外科医の多くが経験し苦労してきたものと思われます。本書はその治療にあたり、単に治療方針を示すだけではなく、どのように重度四肢外傷治療と向き合っていくかを明確に示しています。そして、現時点における重症四肢外傷治療の問題点とそれに対する著者の強い気持ちが全面に打ち出されている内容となっています。

本書では、従来四肢外傷の治療はとかくマイクロサージャリーを用いた再建や“骨”と“関節”の「外傷」として捉えられてきたものを、“軟部組織”の状態が重要であるとしています。“軟部組織”の損傷程度をいかに適切に判断した上で“的確”なデブリドマンを行い、その結果生じた欠損部に各種皮弁を用いて再建を行うとする考え方に変わってきていることを明確に示しています。また、四肢外傷は一例ごとに状態が異なり、また上肢と下肢では治療に対しての考え方が異なる部分があることを踏まえて明確に説明がなされています。患肢温存～機能再建が困難となることが想定される場合の切断に対しての考え方、そして治療が不幸にも上手く行かなかった場合の対処法、深部感染についても解説されています。

本書は基礎編『Basic Point』と応用編『Case Learning』から構成されており、それぞれ“非専門家”と“専門家”に分けた章立てとなっています。そのため、どのようなレベルであっても重度四肢外傷の治療にどのように対峙するか適切な知識が得られる構成となっています。現場でファーストタッチする“非専門家”にとっては治療にあたってどのように対処し、“専門家”に治療を引き継ぐかが分かるようになっていきます。そして“専門家”にとっては、治療のみならず指導をする上でのポイントも合わせて理解できるような内容となっています。

症例を提示した上での解説では、およそ四肢外傷治療を行っていると言われているタイプの症例が網羅されています。無論1例ごとに様々な損傷を受けていて、その状態に応じて臨機応変に治療を進める必要がありますが、年齢を含めた患者の背景に対する考え方も各所に記載されており、通読することでそのエッセンスを感じることができると考えられます。

また、治療の話だけにとどまらず、診療体制についても述べられています。一般的な重度四肢外傷となると治療は当然救急対応となり、時間との戦いとなります。そして様々な制約との戦いでもあり、ときにそれによる言い訳を考えてしまいたくなる状況になりますが、治療システムにまで言及がなされている点が本書の優れた点であることに疑いようはありません。現在の日本の医療システムでの限界はありますが、それが変化するのを待つのではなく、治療を支える“人材”を育て、集約化するとの意見には大いに賛成するところです。なお、各所に『Coffee Break』としてあるコラムにも、実臨床で役立つ“コツ”が複数記載されています。ぜひ飛ばさずに読んでほしいと思います。

整形外科医は重度四肢外傷治療がどのような考えをもってなされているかを知っている必要があります。本書はその道を目指す上での礎を築くことに有用な内容となっています。



建部将広（名古屋大学 四肢外傷学寄附講座）

〔南江堂、本体 10,000 円〕